

## 表浜海岸におけるヤマトマダラバッタの生息状況調査 —長谷川ほか（2011）による調査結果との比較—

久松定智<sup>1)</sup>・長谷川道明<sup>2)</sup>・青木楓太<sup>3)</sup>・平松感大<sup>3)</sup>・伊藤大雅<sup>3)</sup>・  
伊藤愛恵<sup>3)</sup>・各務晴香<sup>3)</sup>・片岡美咲<sup>3)</sup>・水鳥頼人<sup>3)</sup>・野田昇吾<sup>3)</sup>・  
野田侑誠<sup>3)</sup>・柴田航輝<sup>3)</sup>・島村征直<sup>3)</sup>・杉山生成<sup>3)</sup>・上田湧介<sup>3)</sup>・竹内颯希<sup>3)</sup>

A survey on the inhabitation of the orthopteran species,  
*Epacromius japonicus* (Shiraki, 1910) (Orthoptera, Acrididae)  
on the Omotehama coast, central Japan  
—Comparison with the results of the survey by Hasegawa et al. (2011)—

Sadatomo Hisamatsu<sup>1)</sup>, Michiaki Hasegawa<sup>2)</sup>, Futa Aoki<sup>3)</sup>, Kanta Hiramatsu<sup>3)</sup>, Hiromasa Ito<sup>3)</sup>,  
Manae Ito<sup>3)</sup>, Haruka Kakami<sup>3)</sup>, Misaki Kataoka<sup>3)</sup>, Raito Mizutori<sup>3)</sup>, Shogo Noda<sup>3)</sup>, Yuma Noda<sup>3)</sup>,  
Koki Shibata<sup>3)</sup>, Sena Shimamura<sup>3)</sup>, Kinari Sugiyama<sup>3)</sup>, Yusuke Ueda<sup>3)</sup> and Satsuki Takeuchi<sup>3)</sup>

### (Abstract)

A survey on the inhabitation of the orthopteran species, *Epacromius japonicus* (Shiraki, 1910) was conducted on the Omotehama coast, central Japan from August 25 to September 25, 2023. For this study, 19 survey points were selected. Eighteen of these points were identical to those used by Hasegawa et al. (2011). The additional point, Nishinohama in Tahara-shi, was included because *E. japonicus* had been found there in 2021. Hasegawa et al. (2011) previously identified *E. japonicus* at 7 out of the 18 points using the line transect method. However, this study identified *E. japonicus* at 10 out of the 19 points. Site 19 had the highest population density, but its habitat is separated from the Omotehama coast population by buildings and other features. At site 1, the number of individuals was much smaller than that reported by Hasegawa et al. (2011), and this species was not confirmed on the Omotehama coast until sites 6 and 7, indicating that it is an isolated individual that requires conservation. *Epacromius japonicus* was confirmed at sites 13 to 16 and 18 in this survey but was not found at site 17. These results indicate that although the habitat of this orthopteran species is becoming increasingly fragmented in some areas, suitable maritime environments for this orthopteran species are preserved on the Omotehama coast, highlighting its importance as an area for the conservation of the species.

1) 人間環境大学環境科学部フィールド生態学科. Faculty of Environmental Science, University of Human Environments, 6-2 Kami-sanhonmatsu, Okazaki, Aichi 444-3505, Japan.

2) 豊橋市自然史博物館. Toyohashi Museum of Natural History, 1-238 Oana, Oiwa-cho, Toyohashi, Aichi 441-3147, Japan.

3) 人間環境大学人間環境学部環境科学科. Faculty of Human Environment, University of Human Environments, 6-2 Kami-sanhonmatsu, Okazaki, Aichi 444-3505, Japan.

Corresponding author: Sadatomo Hisamatsu. E-mail: s-hisamatsu@uhe.ac.jp

原稿受付 2024年7月23日. Manuscript received Jul. 23, 2024.

原稿受理 2024年11月12日. Manuscript accepted Nov. 12, 2024.

キーワード: 海浜性昆虫, バッタ目, ライントランセクト, 標識再捕獲, 愛知県.

Key words: maritime insects, Orthoptera, line transect method, mark and recapture, Aichi-ken.

## はじめに

日本の自然海岸は開発により急速に失われつつある。自然海岸の消失は同時に、海岸部に生息する昆虫類を含めた生物相の消失も伴う（河上・林, 2008）。そのような海浜性昆虫の一種に、ヤマトマダラバツタ *Epacromius japonicus* (Shiraki, 1910) (第1図A) が知られている。ヤマトマダラバツタは、体長♂ 27～32 mm, ♀ 35～41 mm の中型のバツタ目昆虫である（日本直翅類学会, 2006）。本種は、海岸または大きな河川の砂浜等に生息地が限定されることから、全国30都府県で絶滅～準絶滅危惧にランクされる（NPO 法人野生生物調査協会・NPO 法人 Envision 環境保全事務所, 2024）。愛知県では準絶滅危惧に指定されており（愛知県環境調査センター, 2020）、これまでに旧・祖父江町の木曾川（岡田, 1990）、常滑市の海岸（岡田, 1990）、表浜海岸（田原市恋路ヶ浜, 同市大石, 豊橋市小島, 同市細谷, 同市東細谷）（長谷川, 1991；長谷川ほか, 2011, 2012）から本種の生息が確認されている。このうち、長谷川ほか（2011）により調査が実施された表浜海岸は、愛知県内において本種の最も良好な生息地であり、その保全上重要な地域であると考えられる。長谷川ほか（2011）から10年以上経過していることから、本研究では、表浜海岸において本種の生息状況調査を行うことにより現状を把握し、保全に活用することを目的とする。なお本調査は、人間環境大学「動物学実習」における授業の一環として実施された。

## 調査方法

本研究における調査方法は、基本的には長谷川ほか（2011）に従い、表浜（渥美半島先端の伊良湖岬から今切口に至る、遠州灘に面した海岸約50 kmの間）および田原市西ノ浜において、ライントランセクト法による個体数調査を実施した。その詳細は、以下の通りである。なお本調査においては長谷川ほか（2011）と同様に Jolly-Seber 法による標識再捕獲を試みたが、再捕獲率が低く解析に供するデータをそろえることが出来なかったため、今回の論考には含めなかった。

本調査では、長谷川ほか（2011）により調査が実施された、ヤマトマダラバツタの生息環境となるコウボウムギ *Carex kobomugi* Ohwi やハマヒルガオ *Calystegia soldanella* (L.) R.Br. などの海浜性植物が生育する砂浜18地点のほか、事前調査により本種成虫が確認された田原市西ノ浜を19地点目の調査地点とした（第1表, 第2図）。調査は本種成虫の個体数が最も多い時期を選び、2023年8月25日～9月25日までの間で、晴天時に各地点1回ずつ計8日間実施した（第1表）。各調査地点において、幅約20 m × 長さ約1,000 m の区画を設定し、その区画内の本種成虫の個体数を、手持ち数取器（株式会社 MonotaRO）を使用し、カウントした。また、距離の測定には、ウォーキングメジャー（株式会社 MonotaRO）を使用した。なお、地点1および5は岩場が多いこと等から1,000 mを確保できず、調査区画はそれぞれ約20 m × 700 m, 約20 m × 800 mとした。また、調査時間は1地点あたり20～60分程度で、調査人員は1地点あたり1～8名である（第1表）。

その他、分布図は QGIS version. 3.36.3 (<http://www.qgis.org> (2024年7月1日閲覧)) を用いて作成した。



第1図. ヤマトマダラバツタおよびその生息環境。

A, ヤマトマダラバツタ成虫（豊橋市細谷, 2023年9月7日撮影）；B, 地点7（田原市大石, 2023年9月19日撮影）；C, 地点15（豊橋市東細谷, 2023年9月11日撮影）。

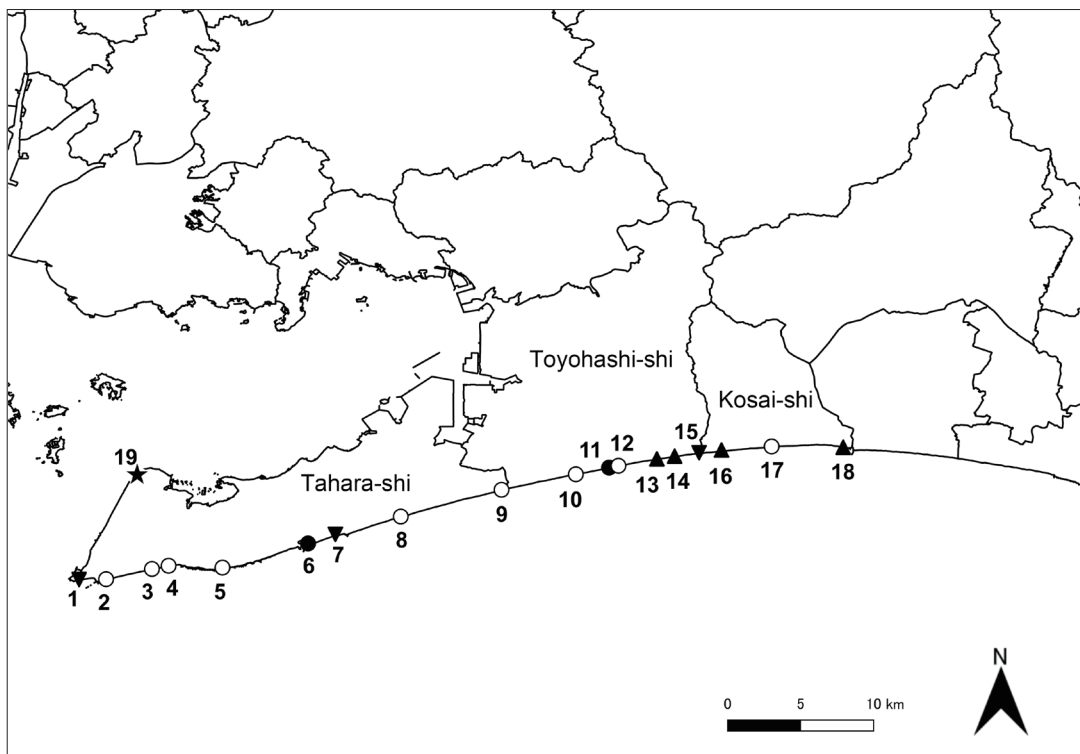
Fig. 1. *Epacromius japonicus* and its habitat.

A, Adult *E. japonicus* (Hosoya, Toyohashi-shi, September 7, 2023); B, research point 7 (Oishi, Tahara-shi, September 19, 2023); and C, research point 15 (Higashihosoya, Toyohashi-shi, September 11, 2023).

第1表. 本調査と長谷川ほか（2011）とのライントランセクト調査結果の比較.

Table 1. Results of the line transect method used by Hasegawa et al. (2011) and the present study.

調査地点	調査地点名	ヤマトマダラバットの確認個体数		調査者数(人)	調査日	本調査における調査範囲 緯度経度(世界測地系)	
		長谷川ほか(2011)	本調査			始点	終点
1	田原市恋路ヶ浜	20	6	8	9/19	N34° 34.864', E137° 01.669'	N34° 34.775', E137° 01.185'
2	田原市日出の石門	0	0	8	9/19	N34° 34.824', E137° 02.576'	N34° 34.980', E137° 03.249'
3	田原市堀切	0	0	8	9/19	N34° 35.107', E137° 03.780'	N34° 35.247', E137° 04.478'
4	田原市小塩津	0	0	5	9/14	N34° 35.473', E137° 05.656'	N34° 35.359', E137° 04.999'
5	田原市和地	0	0	1	9/14	N34° 35.250', E137° 07.282'	N34° 35.330', E137° 07.816'
6	田原市赤羽根	0	4	5	9/14	N34° 36.374', E137° 11.512'	N34° 36.580', E137° 12.119'
7	田原市大石	28	15	6	9/4	N34° 36.790', E137° 12.763'	N34° 36.597', E137° 12.149'
8	田原市大草	0	0	6	9/4	N34° 37.627', E137° 15.696'	N34° 37.810', E137° 16.337'
9	田原市東浜田	0	0	6	9/4	N34° 38.802', E137° 20.186'	N34° 38.942', E137° 20.798'
10	豊橋市伊古部	0	0	1	9/18	N34° 39.366', E137° 22.849'	N34° 39.528', E137° 23.544'
11	豊橋市西七根	0	4	6	9/11	N34° 39.809', E137° 25.075'	N34° 39.689', E137° 24.441'
12	豊橋市東七根	0	0	1	9/18	N34° 40.024', E137° 26.083'	N34° 39.876', E137° 25.377'
13	豊橋市小島	18	24	4	9/7	N34° 40.198', E137° 27.116'	N34° 40.081', E137° 26.462'
14	豊橋市細谷	18	41	4	9/7	N34° 40.304', E137° 27.858'	N34° 40.212', E137° 27.220'
15	豊橋市東細谷	95	81	7	8/25	N34° 40.465', E137° 29.052'	N34° 40.376', E137° 28.400'
16	湖西市白須賀	15	63	8	8/30	N34° 40.585', E137° 30.074'	N34° 40.646', E137° 30.781'
17	湖西市大倉戸	0	0	8	8/30	N34° 40.742', E137° 32.166'	N34° 40.707', E137° 31.475'
18	湖西市今切	19	64	8	8/30	N34° 40.714', E137° 35.780'	N34° 40.806', E137° 35.134'
19	田原市西ノ浜	—	192	7	8/25	N34° 39.041', E137° 03.509'	N34° 39.486', E137° 03.886'



第2図. 表浜におけるヤマトマダラバット分布調査結果 (★は長谷川ほか（2011）では調査されていないが、本調査によって新たに確認された地点を、●は長谷川ほか（2011）では確認されていないが、本調査によって新たに確認された地点を、▲は本調査でも確認され長谷川ほか（2011）より増加した地点を、▼は本調査でも確認され長谷川ほか（2011）より減少した地点を、○は本調査においても確認できなかった地点を示す). なお地図上の番号は第1表と対応する.

Fig. 2. Map showing the surveyed field for *Epacromius japonicus*. ★: this symbol shows new specimens of *E. japonicus* that were surveyed and found in the present study; ●: newly found specimens of *E. japonicus* in the present study; ▲: *E. japonicus* previously found by Hasegawa et al. (2011) and the present study, which was found to be increasing in the present study; ▼: *E. japonicus* previously found by Hasegawa et al. (2011) and the present study, which was found to be decreasing in the present study; and ○: *E. japonicus* previously not found by Hasegawa et al. (2011) and the present study.

## 結果

本調査によりヤマトマダラバツタを確認できたのは、19地点中10地点であった(第1表, 第2図)。長谷川ほか(2011)では、18地点中7地点(地点1, 7, 13, 14, 15, 16, 18)で本種が確認されているが、今回の調査ではこれら7地点全てで本種の生息を確認できた。その他、長谷川ほか(2011)において本種が確認されていない地点6, 11や、今回新規に設定した地点19において、新たに生息が確認された(第1表)。長谷川ほか(2011)による確認個体数と比較して、地点により調査人数が異なるため厳密な比較は難しいが、今回の調査では、地点1, 7, 15において個体数の減少が見られた。一方で、地点13, 14, 16, 18では個体数の増加が見られた(第1表, 第2図)。

＜ヤマトマダラバツタが確認された地点＞

### ① 地点1 (田原市恋路ヶ浜)

観光地として有名な地域である。長谷川ほか(2011)では20個体が確認されたが、本調査では6個体のみ確認された。ヤマトマダラバツタが確認された範囲では、ネコノシタ *Wollastonia dentata* (H. Lév. et Vaniot) Orchard, コウボウシバ *Carex pumila* Thunb., コウボウムギ, ケカモノハシ *Ischaemum antheophoroides* (Steud.) Miq. などの海浜性植物が疎らに生える場所であった。

### ② 地点6 (田原市赤羽根)

長谷川ほか(2011)では確認されていないが、本調査では4個体が確認された。付近に道の駅があることなどから砂浜に人の出入りは多く、そのために一部コンクリート歩道が整備されており人工的な環境ではあるが、東に進むほどハマボウフウ *Glehnia littoralis* F. Schmidt ex Miq., オニシバ *Zoysia macrostachya* Franch. et Sav., ハマニガナ *Ixeris repens* (L.) A. Gray, コウボウムギなどの海浜性植生の幅が広がっている。ヤマトマダラバツタが見られたのは、このような海浜性植物の幅が広がった範囲であった。砂浜には、アツバキミガヨラン *Yucca gloriosa* L. などの外来植物も見られた。

### ③ 地点7 (田原市大石) (第1図B)

長谷川ほか(2011)では、ライントランセクト調査で28個体(標識再捕獲による推定個体数は179.1個体)確認されている。一方で本調査では、15個体が確認された。植生が密で、コウボウシバ, コウボウムギなどの海浜性植物が疎らに生えるほか、外来植物としてアツバキミガヨランも確認された。

### ④ 地点11 (豊橋市西七根)

長谷川ほか(2011)では確認されていないが、本調査では4個体確認された。コウボウムギやグンバイヒルガオ *Ipomoea pes-caprae* (L.) R. Br. などの海浜性植生が見られたほか、アツバキミガヨランも確認された。

### ⑤ 地点13 (豊橋市小島)

長谷川ほか(2011)では18個体確認されており、本調査では24個体確認された。ケカモノハシやハマゴウ *Vitex rotundifolia* L. f. などの植生が見られた。西に行くほど砂浜の幅が狭くなり、本種の個体数は少なくなった。

### ⑥ 地点14 (豊橋市細谷)

長谷川ほか(2011)では18個体確認されており、本調査では41個体確認された。地点15と似た環境である。ケカモノハシやコウボウムギ, ハマヒルガオなどの植生が確認された。

### ⑦ 地点15 (豊橋市東細谷) (第1図C)

長谷川ほか(2011)では95個体確認されており、本調査では81個体確認された。外来植物としてウチワサボテンの仲間 *Opuntia* sp. も見られた。

### ⑧ 地点16 (湖西市白須賀)

長谷川ほか(2011)では15個体確認されており、本調査では63個体確認された。コウボウシバなどが疎らに生える環境である。

### ⑨ 地点18 (湖西市今切)

長谷川ほか(2011)では19個体確認されており、本調査では64個体確認された。砂浜の幅は広く、コウボウシバ, コウボウムギなどが疎らに生える。ハマゴウ, アツバキミガヨランも確認された。

### ⑩ 地点19 (田原市西ノ浜)

長谷川ほか(2011)では調査が行われていない地点であり、本調査により192個体確認された。ただし学生による実習一日目を実施した調査地点であることから、本調査地点のみにおいては重複カウントにより幾分個体数を多く見積もっている可能性もある。しかしながら、今回の調査地点中、最も多くの個体が確認された地点であることには間違いがない。植生はハマゴウのほか、コウボウシバなどが密に茂るほか、砂浜には漂着物が多い。個体数が多いことや植生が密であることから、本地点においては、植生のない砂浜部分でも多くの個体が見られた。

＜ヤマトマダラバツタが確認されなかった地点＞

### ① 地点2 (田原市日出の石門)

長谷川ほか(2011)においても確認されていない。砂浜の幅が狭く、ハマゴウ, ハマヒルガオ, コウボウ

ムギなどの海浜性植生のほとんどは、護岸ブロックの後方に1m程度の幅であるのみであった。

#### ② 地点3 (田原市堀切)

長谷川ほか(2011)においても確認されていない。コウボウシバ、ネコノシタ、ハマゴウなどの海浜性植生が見られたが、ほとんどが護岸ブロックの後方で確認された。調査日には砂浜と並行して走る車道の工事がなされていた。

#### ③ 地点4 (田原市小塩津)

長谷川ほか(2011)においても確認されていない。砂浜の幅は狭いが、ハマゴウ、ネコノシタ、ゲンバイヒルガオなどの海浜性植物の種類は多い。しかしながらヤマトマダラバツタは確認されなかった。外来植物として、ウチワサボテンの仲間も確認された。

#### ④ 地点5 (田原市和地)

長谷川ほか(2011)においても確認されていない。砂浜の幅は狭い。護岸ブロックより海際は岩が多く、護岸ブロックより山側は、ハマゴウなどが繁茂している。

#### ⑤ 地点8 (田原市大草)

長谷川ほか(2011)においても確認されていない。砂浜の幅は狭く、一部、礫浜となる。海浜性植物以外の植生も多く確認された。

#### ⑥ 地点9 (田原市東浜田)

長谷川ほか(2011)においても確認されていない。砂浜の幅が狭く、ハマゴウなどの海浜性植生は護岸ブロックの後方に見られた。

#### ⑦ 地点10 (豊橋市伊古部)

長谷川ほか(2011)においても確認されていない。砂浜の幅は広いが、コウボウムギ、コウボウシバなどの海浜性植生は少ない。

#### ⑧ 地点12 (豊橋市東七根)

長谷川ほか(2011)においても確認されていない。砂浜の幅は狭く、ハマエンドウ *Lathyrus japonicus* Willd., ハマゴウ、ゲンバイヒルガオなどの植生は、護岸ブロックの後方に見られた。また、アツバキミガヨランも確認された。

#### ⑨ 地点17 (湖西市大倉戸)

長谷川ほか(2011)においても確認されていない。海浜性植生は多くはなく、大部分は護岸ブロックの後方に見られた。

幅が広く、海浜性植物が生育する移行帯(エコトーン)の環境であった。表浜の海岸は大部分が砂浜であるが、そこには、コウボウムギ、コウボウシバ、ハマヒルガオ、ハマボウフウ、ハマエンドウ、ハマニガナ、ハマアザミ、ケカモノハシなどの海浜性植物の生育が見られ、愛知県域では海食崖周辺のハマヒサカキ、トベラなどの風衝低木林へ、静岡県域では砂丘背後のクロマツ林へと移行する(静岡県・愛知県, 2015)。そのような移行帯は生物多様性ホットスポットとして知られており、その保全は重要である。そのような中においてヤマトマダラバツタは体長も大きく、他種との判別も比較的容易であることから、良好な海浜性環境の指標種としても有用であると考えられた。

地点19(田原市西ノ浜)では、今回の調査で初めて本種が確認された。この地点は三河湾に面しているため表浜の範囲からは外れているものの、調査地点中、最もその個体群密度が高かった。また、恋路ヶ浜の個体群とは、途中でフェリーターミナルや道の駅などで砂浜が分断されることから、別の個体群であると考えられる。調査地点周辺には幅の広い砂浜が連続するため、周辺環境にも多くの個体群が生息していると推測される。

地点1(田原市恋路ヶ浜)の個体群は、長谷川ほか(2011)の調査結果と比較して、大幅な個体数の減少が見られた。今回新たに確認された地点6や、長谷川ほか(2011)および今回の調査において再確認された地点7からも距離的に離れていることから、孤立した個体群であると考えられ、何らかの保全対策が必要であると考えられた。

地点7(田原市大石)では、長谷川ほか(2011)に引き続き、本調査でも本種の生息が確認された。また、今回の調査では、地点6(田原市赤羽根)において、初めて本種が確認された。この地点は、地点7(田原市大石)と連続する砂浜である。地点7において、長谷川ほか(2011)よりも個体数が減少しているものの、連続する砂浜に広く分布していることが示された。

地点13(豊橋市小島)～地点16(湖西市白須賀)にかけては連続する砂浜であり、長谷川ほか(2011)に引き続き、今回の調査でも本種の生息が確認された。特に地点15以外では、個体数の増加が確認された。また、これらと連続する砂浜である地点11(豊橋市西七根)では、今回の調査で初めて本種が確認された。これらの間にある地点12(豊橋市東七根)では今回の調査においても本種を確認できなかったものの、これら連続した砂浜に、現在も生息地が残されているこ

## 考 察

今回本種が確認できた10地点はいずれも、砂浜の

とが確認された。

地点 18 (湖西市今切) では、長谷川ほか (2011) に引き続き、今回の調査でも本種が確認され、また、大幅な個体数の増加が見られた。また、地点 18 と連続する砂浜である地点 17 (湖西市大倉戸) は、長谷川ほか (2011) においても本種は確認されず、同論文ではその理由として、バイパス工事による砂浜の整地、改変が挙げられている。この地点 17 では長谷川 (2011) に引き続いて本種は確認されなかったことから、この工事による個体群の分断の解消には未だ至っていないと考えられた。

今回のライントランセクト法による調査において、部分的に本種の生息地である移行帯の分断が進んでいる砂浜もあるが、長谷川ほか (2011) による結果と比較してもその個体数の大幅な減少は確認されず、現在も表浜においては、本種の生息環境が良好に保たれていることが示唆された。本種の食性や最適な生息条件は未だ明らかとなっていない。今後は、これら基礎的な生態情報も合わせて解明していくことが望まれる。

## 謝 辞

本調査の調査計画や実施においてご指導を賜った菊地波輝博士 (豊橋市自然史博物館)、調査にご同行頂いた宮西葵助手 (人間環境大学) に、御礼申し上げます。

## 引用文献

- 愛知県環境調査センター, 2020. 愛知県の絶滅のおそれのある野生動物 レッドデータあいち 2020 動物編. 愛知県環境局環境政策部自然環境課, 名古屋, 769 p.
- 長谷川道明, 1991. 豊橋市表浜におけるヤマトマダラバタとハマズズの採集例. 佳香蝶, 42 (164) : 63.
- 長谷川道明・本多洋平・松山晃大・藤目進太郎・石田直哉, 2012. 表浜海岸における絶滅危惧種ヤマトマダラバタの移動と分散について. 豊橋市自然史博物館研究報告, (22) : 19-22.
- 長谷川道明・坂部あい・谷中亮太・本多洋平・白井和紗・石田英寛・松山晃大, 2011. 表浜海岸における絶滅危惧種ヤマトマダラバタの分布について. 豊橋市自然史博物館研究報告, (21) : 1-6.
- 伊藤嘉昭・村井 実, 1977. 動物生態学研究法-上巻-. 古今書院, 東京, 268 p.
- 河上康子・林 成多, 2008. 日本海沿岸の海岸性昆虫類の研究 (3) 青森県津軽半島. ホシザキグリーン財団研究報告, (10) :

25-35.

- 日本直翅類学会 (編), 2006. バッタ・コオロギ・キリギリス大図鑑. 北海道大学出版会, 札幌, 687 p.
- NPO 法人野生生物調査協会・NPO 法人 Envision 環境保全事務所, 2024. 日本のレッドデータ検索システム. <http://jpnrd.com/index.html> (2024年7月12日閲覧).
- 岡田正哉, 1990. 愛知県の直翅目. 愛知県の昆虫 (上), 愛知県農地林務部自然保護課, 名古屋, 87-93.
- 静岡県・愛知県, 2015. 遠州灘沿岸海岸保全基本計画 (変更). [https://www.pref.aichi.jp/uploaded/attachment/110020\\_42307\\_misc.pdf](https://www.pref.aichi.jp/uploaded/attachment/110020_42307_misc.pdf) (2024年8月14日閲覧).
- 渡辺 守, 2007. 昆虫の保全生態学. 東京大学出版会, 東京, 190 p.

## (要 旨)

久松定智・長谷川道明・青木楓太・平松感大・伊藤大雅・伊藤愛恵・各務晴香・片岡美咲・水鳥頼人・野田昇吾・野田侑誠・柴田航輝・島村征直・杉山生成・上田湧介・竹内颯希：表浜海岸におけるヤマトマダラバタの生息状況調査—長谷川ほか (2011) による調査結果との比較—

表浜海岸において、愛知県準絶滅危惧種ヤマトマダラバタの生息状況調査を、ライントランセクト法により実施した。調査地点は長谷川ほか (2011) により調査が実施された 18 地点のほか、事前調査により本種成虫が確認された田原市西ノ浜を 19 地点目とした。長谷川ほか (2011) では 7/18 地点で本種が確認されているが、今回の調査では 10/19 地点で本種の生息が確認された。このうち地点 19 は、今回の調査地点中最も個体群密度が高かったが、表浜の個体群とは建築物等により生息域が分断される。地点 1 では、長谷川ほか (2011) よりも大幅な個体数の減少が見られ、表浜においては地点 6, 7 に至るまで本種が確認されていないことから、保全が必要な孤立した個体群であると考えられた。地点 13 ~ 16 および地点 18 では本調査でも本種の生息が確認されたが、地点 17 では本調査でも確認できなかった。これらの結果から、表浜海岸は、一部地域において本種の生息域の分断化が進むものの、全体としては良好な生息地環境が維持されており、その保全上重要な地域であると考えられた。